

# J.—J.ルソーにおける、自然環境の認識と

## 社会的ジレンマ問題

### —考察序説—

荒井宏祐

## J.—J. Rousseau, Nature Watcher with the compound and refractive eyes of his soul

Hirosuke Arai

This paper elucidates Rousseau's three-dimensional perception of nature. He first viewed nature with the compound vision of his mind. In this perceptual mode, for example, he not only celebrated the beautiful charm of vegetables, but also perceived their ecological function. Second, he recognized the general characteristics and structure of flowers, but also perceived "l'ordre des choses" in the world, reflecting a perceptual insight into the natural environment. Third, he often drew out social implications from observed natural phenomena, thus perceiving "signs" in the natural world that indicated essential aspects of his thought on the relations between humans and society. Thus, Rousseau viewed nature through the refractive lens of his own soul. It is said that Rousseau used the term "nature" in many diverse ways. In this paper, I introduce an alternative thesis. Rousseau's wide and deep vision of the natural environment opens the reader to the idea of virtue as a possible solution for social dilemmas we confront in contemporary environmental problems. The will of each individual must be reconciled to the general will which may exist in the global ecosystem, as Rousseau anticipated in the context of "Discours sur l'Économie Politique", "Émile" and "Du Contrat Social".

## はじめに

J.-J.ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712~1778)はその著作の中で、ある言辞をしばしば多義的に用いることがある。カッシーラーは「社会」や「sentiment」の「二重語義によくよく注意しなければならない。」<sup>(1)</sup>と述べ、また恒藤武二は「一般意志という語はルソーにあってはきわめて多義的に使用されている。」<sup>(2)</sup>と指摘している。とりわけ「難解な語」とされているのが「自然」であり、平岡昇はこの語が「本来彼に独得な両義的思考法の好対象」<sup>(3)</sup>ではないかと言っている。舟橋豊は、この語義の分析を試み、ルソーの「自然」とは、「神であり、宇宙を統べる整然たる法であり、人間界の正にして善なる自然法であり、崇高美あふれるアルプスの山河であり、さらには生まれながらにして善なる人間の本性でもある。」<sup>(4)</sup>と述べている。平岡はまた、ルソーの「自然」は彼自身の「多様で自由な使用法を通じて人々の心につよく訴えかけてくる魔力」<sup>(5)</sup>を持つとしている。

たしかに「自然」の語は、「ルソー的ディアレクティック」とともに、あたかも『オデュッセイア』にあらわれる魔女セイレーンの「甘く楽しい歌声」のように、我々を「前よりもっと物識りになりお帰り」<sup>(6)</sup>願うがごとく、さまざまな声をもって語りかけてくるようである。

ともあれルソーの「自然」の中には、上記舟橋の分析にも「アルプスの山河」とある通り、自然環境が含まれていることは明きらかである。これまで筆者は、ルソーの自然環境としての「自然」認識のうちには、生態作用を持つ「環境」としての「自然」認識が含まれていることなどを指摘するとともに、これらとルソーの文明社会批判や「自然人=エミール」の「自然現象・事物の教育」=「環境教育」との関連などに考察を加えてきた<sup>(7)</sup>。本稿では、これらをもとに、ルソーの自然環境としての「自然」の多義性の特徴についてさらに考察と整理を試みるとともに、新たに彼の「自然」あるいは「環境」認識と、その政治思想上の基本概念の一つである、「一般意志」・「徳」や、「万物の秩序」とのかかわりを探り、これらをふまえて現在環境問題に関連して注目されつつある「社会的ジレンマ」問題との関係を、他の諸言説とともに一瞥することで、ルソー思想の現代的意義の一端に触れてみた。

これらはいまだ試論的段階ではあるが、その目的は、これまでの検討にひきつづき、ルソーの社会・教育・政治・宗教・国際平和・文学などの諸思想・言説と、「自然」あるいは「環境」認識がいかなる関連を有するのかを探索することにある。

## 1 ルソーにおける自然環境としての「自然」認識と特徴の探求

『新エロイズ』、『告白』、『孤独な散歩者の夢想』(以下『夢想』)、『人間不平等起源論』(以下『不平等論』)、『エミール』などに見るルソーの自然環境観察は、きわめて複眼的であるが、ここではとりあえず社会学における「環境」の三分区<sup>(8)</sup>(自然・社会・記号)を、環境=自然と読みかえることで以下のような整理を試みる。

(1) 自然環境としての「自然」

これはさらに、次の二つに細分できる。

- ① 水流・山河・動植物など個々の自然界構成物やそれらの物理的なありさまである、自然環境
- ② 土壌と植物間におけるエコロジカルな作用など生態系を成している、「環境」としての自然環境

(2) 社会環境としての「自然」

これは、次の二つに分別できる。

- ① 土地や森林など個別の自然界構成物が、人工の手が加わることにより、社会の中に組み込まれることで、制度環境の一つとなる自然環境
- ② 都市化や鉱工業化などの社会変動により、大気汚染や職業病など人間の生命・健康を全体として脅かす公衆衛生・労働環境の一つとしての自然環境

(3) 記号環境としての「自然」

いわば、物理的に在る自然環境にルソーが与えた「意味づけ」で、次の二つに分けられる。

- ① 植物や島などの個別の自然界構成物がルソーによって特別に意味づけされることで、記号的に扱われた自然環境
- ② 自然界あるいは宇宙・世界全体に関する独自の意味づけにより、トータルに記号化された自然環境

このうち①の一部は後述の通り、すでにスタロバンスキー、ポラン、中川久定などによってその意味づけに注意が払われているが、さらに後に見るように、より多くの例示が可能である。

以上、三つの整理区分を試みてみたが、ルソーの「自然環境としての自然」の観察は、おそらくこれに尽きるものではなく、「その独自性の秘密をやすやすと明かしてはくれない」<sup>(9)</sup>であろう。しかしともあれその「秘密」の一端を探るため以下、(1)～(3)の特徴をややくわしく吟味してみる。

(1) 自然環境としての「自然」

① 個々の自然界構成物やそのありさまとしての自然環境

この区分に登場する個別的な自然環境の特徴の一つは、その種類が多様であることであろう。筆者はすでに触れたことがあるので詳述は避けるが、それは、例えば水流、森林、湖、島、山岳、大地、空気、断崖、滝、田園、牧場であり、また、小鳥、鹿、犬、猫などの動物や多彩な植物類である。さらに「人気のない場所」や「やすらかな静けさ」であり、美しい景観でもある。ルソーの「自然」が多義的であるように、自然環境としての「自然」も実に多種多様な内容と性格を持って登場している。この意味で、ルソーにとっての「自然」の一つは、自然界を構成する具体的な事物や現象、雰囲気であることに改めて言及しておきたい。

なおついでながら、ギリシャ思想の研究者、ブチャー(S.H. Butcher)は、ルソーとアレクサンドリア時代のギリシャ人の自然観照の態度を比較して、後者はルソーよりもっと静かな自然に美を感じているとした。そして彼らにとって「山や寂しい森や怒濤の海は、…恐怖や反発や、美と絶縁し、芸術と疎隔する力などの映像を感ぜせしめる」<sup>(10)</sup>と述べて、「こ

わくなるような両側の断崖」(『告白』上、桑原武夫訳、P.246、岩波書店、1993年)などを好んだルソーとの間に、「古代と近代の世界の二つの典型的な発想」を見い出そうとしている。ルソーは後述の通り、必ずしも「静かな自然の美」を好まなかったわけでもないが、ともあれ彼の多様な自然観照態度の形成過程と、自然観に関する古典教養との関連を探ることも興味が寄せられるところであろう。

## ② 生態作用を持つ「環境」としての自然環境

「不平等論」原注(d)に、ルソーはいくつかの生態学的知見を示している。この点もすでに他で論じているので詳述を控えるが<sup>(11)</sup>、彼はビュフォンの『博物誌』に学ぶとともに自ら「実験」などを行うことで、森林の保水作用や土壌の生態作用の保持と植物との関係を理解していた。この意味では、いわばルソーは限定的ながら、上記①の物理的な自然環境の中に、生態系としての「自然」が隠れていることをビュフォンとともに発見していたといえよう。

ビュフォンの『博物誌』は、「十八世紀の蔵書のなかで『ヌーヴェルエロイーズ』や、『百科全書』よりも、より頻繁に見出される」<sup>(12)</sup> 当時のベストセラーで、事実ルソーの蔵書等の目録にもその書名が見い出される。<sup>(13)</sup>

彼は『エミール』の中でもその一節を引用している(今野一雄訳『エミール』上、原注15、P.383、岩波書店、1994年)が、ビュフォン研究の側では「ルソーは『博物誌』を読み続け、たえず気をつけてその諸巻を入手しようとした。」とされている。ビュフォンの生態学的知識は、ルソーが『不平等論』原注(d)で引用した『博物誌』のみならず『自然の諸時期』の中にも豊富に示されている。ビュフォンはそこで、「自然の活力の大小は温度の違いに依存している。すべての有機体の成長、発育、生成は、このような一般的原因の個別的結果でしかない。」としている。また「草原の広がる地方では、草を刈り取る以前には常に大量の露があり、しばしば小雨も降るが、草が除去されてしまうとそれもすぐに止む。したがってもしわれわれの草原が、アメリカのサヴァンナのように常に大量の草に覆われていたら、小雨はもっと頻繁に降り、簡単に止むことはないであろう。草は減少するどころか、地上で乾燥し腐る草そのものを肥料にして、たえず増加し続けるからである。」<sup>(14)</sup> などと指摘している。生態系秩序の護持に特別の注意が払われている現在、18世紀においてその存在に注目し、文明化がこれを破壊しつつあることに注意を促したルソーやビュフォンの言説は、もっと注目されてよいのではなかろうか。

もう一つ考察すべき研究課題は、この両者間の影響関係であろう。二人の間には同時代人として手紙の往復や訪問などの交流があり、百科全書の寄稿者のフォルメも「ルソー氏とビュフォン氏とは、それぞれのジャンルで似たような立場をとっている。」<sup>(15)</sup> と批評したことが知られている。ビュフォン研究によれば、彼は、「ルソーのいう自然人は神話にすぎない」<sup>(16)</sup> と考えたとされるなど相違点もあるようだが、「実のところ、悪は自然というよりはわれわれから生じる。」との彼の言葉は、ルソーの「テーマといかに近いものであるか」、また「『博物誌』全体に見られる家畜に対する人間の横暴な権力というテーマ」<sup>(17)</sup> は、ルソーの、動物が人間によって「無用に虐待されないという権利」(本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起源論』P.32、岩波書店、1990年)の主張を、さらにビュフォンの「自然の懐の中に入り込めば入り込むほどますますその創造者に感嘆し、深い尊敬の念を捧げてきた。」<sup>(18)</sup> との言辭は、ルソーの「自然という書物…を読むことによってこそ、わたしはその神聖な著

者を崇拜することを学ぶ」(『エミール』中、P.207~208)という言葉を出させよう。とくにビュフォンが示した生命体の同一性と多様性への驚異の念は、ルソーの生物種の多様性や植物の通有性に対する「驚喜」とほぼ重なっており、この二人がともに、さまざまな生物種が、同一性と多様性を持ちつつ生々と共生している、生命感への感動を共有していることがわかる。このように両者は研究方法、内容とともに、類似性があり、とくにルソーの「環境」としての「自然」認識の形成過程を解明していく上で、ルソー研究の側からもビュフォンとの関係をさらに探ることが重要と思われる。<sup>(19)</sup>

## (2) 社会環境としての「自然」

### ① 制度環境としての、個別的な自然環境

ルソーにとっての土地は、その中に「植物に適した物質」(la substance propre à la végétation—O.C., t. III, P.198)<sup>(20)</sup>を含む土壌でもあったが、同時にそれは私有地化によって社会を不平等化=文明化する制度的、社会的意味を持つものであった。<sup>(21)</sup>また彼が保水作用を持つと指摘した森林も「私有が導入され労働が必要」になると、「人々の汗でうるおされなければならなかった」「原野」に変身させられる。そして原野は「奴隷制と貧困 (la misère) とが芽生え、生長」する舞台として文明社会の中に組み込まれ、「人間を文明化 (civilisé) し、人類を墮落させた…小麦」(『不平等論』P.96~97, O.C., t. III, P.171)を生み出す生産資源となるのである。即ち、ルソーの上記(1)、①の自然環境を見る眼は、同時に②の「環境」としての「自然」を見つめつつ、かつ文明社会の中に組み込まれていく「自然」をとらえている。彼は、そこに、「平等」と生態作用の破壊という二つの不吉な兆候を見出し、これらを文明社会批判の重要な根拠としていく。もはや土地や森林は多くの生命の魅力が生態系の中で花咲く場所ではなく、私有地制という社会制度の中に埋め込まれた存在と化していく。そしてルソーにとって、「生まれつきよい者である…人々が悪くなるのはただその制度のため」(「マルゼルブへの手紙」『エミール』下、P.301)なのであった。

### ② 生命・健康に有害な公衆衛生・労働環境としての自然環境

制度的に社会化された自然環境のほかにルソーの目に映ったものは、人間の生命・健康に直結する自然環境を都市化(人口過密化)が悪化させ、人々の健康を奪っていく姿であった。パリの「汚い臭気にみちた狭い路…不潔と貧困の雰囲気」(『告白』上P.238)、「集まった多数の人々の悪い空気のために発生する伝染病」などは、「われわれが自然の教訓を軽蔑したことに対して」「自然」(la nature)に支払った「高い代価」(『不平等論』原注(i)P.150~151)であった。ここでは自然環境が公衆衛生環境の一つとして認識されている。

なお、パリの大気汚染や不潔、悪臭などの実態は、メルシエの『十八世紀パリ生活誌—タブロー・ド・パリ—』にその惨状が詳述されている。メルシエは「植物には、大気を衛生的な状態に保ち、一切の腐敗を浄化する性質がある」。古代人は公共広場などの緑化に努めていたのに「なぜ我々は彼らを模倣しないのだろうか?」といっている。<sup>(22)</sup>パリの公衆衛生規制は12世紀頃から始まっており、フランス革命期にも何度か法規制が行われていたと伝えられるが、その効果は十分とは言えなかったもののようである。<sup>(23)</sup>

さらにルソーは、鉱工業によって「田園の仕事の楽しい光景」が、「煙と火の渦巻く工場」にとって代わり、「鉱山の毒氣に憔悴したみじめな人たちの青ざめた顔」が「緑の野や花、青い空、恋する牧人や頑健な農夫たちの姿」(今野一雄『孤独な散歩者の夢想』P.117、岩

波書店、1994年)に一変する様子を見て取っている。<sup>(24)</sup> ここでも草花と青空におおわれた美しい田園である自然環境は、いわば第2次産業化に向う経済変動によって、働く人々の「寿命を縮めたり、体質を壊したりする」(『不平等論』原注(i)P.154) 職業病の温床となるなど、農業労働のための自然環境であった田園=自然が、人間の生命・健康に有害な鉱工業労働の労働環境として認識されつつあることがうかがわれよう。

### (3) 記号環境としての「自然」

#### ① 記号としての、個々の自然界構成物=自然環境

上記(1)、①の物理的な「自然」を構成する一つ一つを見るルソーは、そこに実に多種多様な意味づけを与えている。その一例がすでにスタロバンスキーによって指摘された「記憶喚起用の記号(*signe mémoratif*)」<sup>(25)</sup>としての植物標本である。彼によればルソーにとっての植物標本は、実際の植物の記憶を喚起するだけのものではなく、それはルソーの青春時代の幸福感を喚起するものとしての「記号」でもあった。しかし植物に対するルソーの意味づけ=記号化はこれにとどまらず、すでに筆者が別稿で指摘したように<sup>(26)</sup>数多くある。例えばそれは⑦「みんなが花壇でみとれる」花が、実はルソーにとっては本来の、つまり自然の「能力を奪われた怪物」で、「この誤りはとくに市民社会において行なわれて」<sup>(27)</sup>いるものでもあった。(ルソーの持論の顕現者としての植物)。⑧「あの優雅な変化に富んだ形態…が植物に付与されたのは…乳鉢の中ですりつぶされるためにすぎないというのか。ああ、自然を愛することを知ろうではないか…自然は私たちの利益のために身を飾ったのではない。」<sup>(28)</sup>(実用価値とは独立の、自然愛の対象として、また生命体として独自の生命価値を宿す植物)。⑨「植物学はどういう教育においても忘れられています、あなたの子供たちの教育のもっとも重要な部門となるべきです。」<sup>(29)</sup>(教材としての植物)などがあげられる。

一方ポランは、ルソーの政治学を「孤独の政治学」と呼び、ルソーの著作の中で「島についてのテーマが繰り返される」ことに注目した。ポランから見ると、島こそが「この自閉的孤独の象徴であり、…ルソーにとって…それは永遠の郷愁なのである。」<sup>(30)</sup>。しかしルソーにおいて島はこれらとともに、彼の心の中のもっとも深く激しい痛みであると思われる、強者による弱者の一方的収奪を想起させる自然界構成物の一つでもあった。次のルソーの観察を見よう。

この美しい湖は、…そのなかにふたつの小さな島を囲んでいる。そのひとつには人が住み耕地もあって、周囲は約半里。ずっと小さいもうひとつのほうには人も住まず、荒れたままで、大きいほうの島の風波により崩壊を修復するためにたえずそこから土を削って補っていくので、やがては姿を消してしまうことだろう。こんなふうに弱者の身体はいつも強者のために利用される。(『夢想』第5の散歩P.80)(圏点引用者)

この「大きいほうの島」と「ずっと小さいもう一つ」との関係の克服こそは、『社会契約論』や『エミール』で示されたルソー永遠のテーマであったことを改めて指摘したい。<sup>(31)</sup>

さらに中川久定は、マルセル・レモンを引用しつつルソーの植物の「細部」への注視が、「私」を「全体」の「観照」へと誘い込み、ついに「自我を自然全体と融合」<sup>(32)</sup>させることに注意している。つまりここでは、植物という一つの自然界構成物が、自我(個)と自然全体への融合の媒体としての意味を与えられているのである。中川によると、マルセル・レモ

ンは「恐らくこれは、心霊修業（霊操）としての植物学の発見である。」<sup>(33)</sup>と見ているとのことである。

また中川は、前述のスタロバンスキーの「記憶喚起用の記号」に言及しつつ、「過去と現在とのつながりのうちで…一切を描き出す…こういうルソー特有の自伝の描き方…を…意識の二重化作用と呼ぶ」と述べ、植物がこの「作用の媒介としての機能を果たしている」<sup>(34)</sup>としている。これらはいづれも植物という個別の自然界構成物に、ルソーが与えたさまざまな意味づけを論じているものと思われる。

ここで、ルソーによる森林の記号化に注意してみよう。桑原武夫は、ルソーの愛した自然環境としての「自然」は、たとえ彼が平野よりも山岳や断崖、急流、暗い森などを好んだとしてもけして「動物的ないし野蛮の自然ではなく、人間化された自然」であると同時に、「空想でふくらんだ自然」で、「スイスやフランスの田園のやさしい自然がルソーの心にやきつけられ、理念としての「自然」の原型をつくった」<sup>(35)</sup>と述べている。ルソーは桑原が引用するように、ほど遠からぬ森の中に入って「そこに原始時代のおもかげをもとめ、見だし…人間の本性を赤裸々にあばぎ、…人為の人と自然人とを比較することによって、人為の人のいわゆる進歩改良のなかにこそ、その不幸の真の原因があることを人々に示そうとした。わたしの魂は、…高められ、神の間近かにまで飛翔した。」（『告白』中、P.174）と言っている。平岡昇は、「自然状態、自然人の着想の段階で、社会人（市民）、社会状態（社会契約）の直観があったと考えられる」<sup>(36)</sup>と述べているが、ルソーのこの告白と平岡の分析によれば、森林は彼にとって過去（原始時代）と現在（進歩改良のなかの不幸）を同時に喚起する「意識の二重化作用」を果す存在であることを越え、自然状態、自然人の着想を通じて、「市民」や「社会契約」という将来につながる理念の原型を直観させたものと理解することもできよう。つまり森林という自然界構成物の一つは、『告白』の中で過去・現在・将来を結びつける、いわば意識の三重化ないし通時化作用を促す媒体として意味づけられているといえよう。

## ② 記号体系としての自然界全体＝自然環境

ルソーの眼はよく知られるように、森林や植物など個々の自然界構成物のみならず、自然＝宇宙全体に向かい、そこに一定の調和ないしは秩序や法則、存在間の「内密の対応関係…みごとな協力」（『エミール』中、P.140）があることを見い出して、「万物の秩序をあたえている存在者…をわたしは神と呼ぶ。」（同上、P143）とした。これがルソーのいう「自然宗教」（la Religion naturelle—O.C., t. IV, P607）だが、それをエミールに伝える場所は、下にポー河の流れが、「かなたにはアルプスの山なみがそびえている」、「高い丘の上」が選ばれた。そこでは、「まるで自然は、わたしたちの目のまえにその壮麗な景色をくりひろげて、わたしたちの話のテキストを提供しているようだった。」（同上、P120）とされている。舟橋豊は、「この一節においては、自然は神がみずからの手で書いた聖書とみなされており、自然の壮麗さは聖書のうるわしい聖句に対比されている。」<sup>(37)</sup>と述べている。ルソーにとって自然の景観は、神の存在を想起させ、自然宗教という独自の宗教観を抱かせる記号として意味づけられたのである。

またルソーは前述のように、自然愛の感情や動植物など多くの生命の共生関係、植物に対する人間の实用価値とは独立の内在価値、それに人間に不当に迫害されない動物の権利などを認めていた。そしてさらにこの①の冒頭述べたように、個と全体との有機的関連の存在を強調するほか、自分（個）が「万物の体系（la systeme des êtres）のなかに溶けこみ、自然

全体 (la nature entière) と同化するとき…言い表わしがたい陶醉を感じ、恍惚を覚える」(『夢想』P.115, O.C.t.I, P.1066) と言っている。

現代の環境倫理の考え方では部分と全体との調和、生命間の共生、生態圏秩序などを重視しているが、これらはどれも今あげたようなルソーの考え方と通底するところが多い。宇宙あるいは自然界全体の諸相は彼を、いわば自然の環境倫理的理解に近づける記号体系として作用したともいえるであろう。

#### (4) 自然環境としての「自然」認識における諸特徴のまとめ

以上、社会学における環境区分を少し読み変えて、ルソーの自然環境としての「自然」認識を整理してみた。自然環境を見つめるルソーの第1の特徴は、上記(1)～(3)の各①で示されたような、山河や土地、動植物など個別の自然界構成物、つまり「ミクロな自然」とともに、同各②で見るとように生態系や大気汚染、万物の秩序を宿す自然界全体、即ち「マクロな自然」のありさまの両方をともにとらえる「複眼」にあると思われる。また第2の特徴は、このミクロな自然が、マクロなそれと緊密なつながりがあることを、いわば「透視」している点にある。これは、(3)の①で見たように植物の細部への注視を通じた、自然全体への個の融合に典型的に見られる。そして第3の特徴と思われるものが、(3)で見たような自然環境の記号的認識、即ち意味空間としての「自然」の「立体的把握」であろう。ルソーは、ミクロ・マクロ双方の自然を複眼で見つめてその関連をとらえつつ、そこにさまざまな意味づけを与え、それを自らの思索の糧とし、また自説主張の根拠となしている。彼の森林体験は、自然状態と自然人のアイデアを育み、自然界の秩序認識は自然宗教を生み出し、脱自然化＝文明化は自然の生態系を破壊するばかりか、人間にとって基本的に重要な生命・健康を脅かす労働・衛生環境の悪化をもたらすため、批判されるべき対象となったのである。

環境記号論では、環境を「人間と自然のインターフェイスとしての記号」としてとらえ、「自然は人間の前に直接現われるものではなく…環境として現われる」<sup>(38)</sup>と見る。ルソーが自然を何らかの意味を持つ記号として考え、または感じとるエネルギーは並外れて大きなものといえようが、その方法上の”秘密”の一つは自然のミクロ、マクロ両面のみならず、(2)で述べた社会環境としての自然を含め、自然環境を物理的存在としてとらえると同時に、生態系として、また社会化されうるものとして、そして多様に記号化されうるものとして把握しようとする、”ホロニックな立体的透視力”にあるとあってよいのではなからうか。ルソーの『学問芸術論』を生んだ「突然の靈感」は、学問と芸術の復興が習俗の純化に寄与しなかったこと、つまり社会的には「人間の生まれながらの自由をおしこる」すなどのマイナス効果を及ぼす逆機能として作用してきたとの独自の着想を含むことが、「マルゼルブへの手紙」にうかがわれる<sup>(39)</sup>。ルソーの自然環境を見る”ホロニックな立体的透視力”は、あるいはこのパラドキシカルな発想の成功を一つの発条として、そこから発展していったものかもしれない。

ともあれ社会学や環境記号論が提起している「記号環境」という視点は、多様をきわめるルソーの「自然」認識の整理軸の一つとして有効なところがあるように思われる。ルソーの自然・社会に関する諸言説を、この視点からさらに体系的に整理してみると今後の研究課題の一つであろう。

なお、環境記号論の、人間にとっての自然は「決してわれわれに直接現象するものではなく、…インターフェイスに現われた環境から概念的に構成されたもの」<sup>(40)</sup>との考え方は、リップマ



ソンの、「彼らが心の中に抱いている世界像」である「擬似環境」の考え方に近い。リップマンはさらに、これが「思想、感情、行動を決定する一つの要素である」<sup>(41)</sup>とし、「人びとの脳裏にあるもろもろのイメージ、つまり、頭の中に思い描く…他人…目的、関係のイメージ…あるいは集団の名の下に活動する個人が頭の中に描くイメージ」を「世論」(Public opinion)と呼ぶとともに、集団全体の「共通意志」との関連を考察している<sup>(42)</sup>。

ルソーも「市民たちの心の中にぎざまれている」習俗や慣習のほか「ことに世論」を「すべての法の中でもっとも重要な法」とし、一般意志と特殊意志の合致(conformité)による社会契約論的世界の習俗純化のためにも「人々の世論(les opinions)を正しくせよ」(桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』P.81, P.175、岩波書店、1992年)と述べている。世論の問題は現在、政治的意思決定過程とのかかわりが議論されているが、ルソーが「世論」に与えた政治的、社会的意味づけは、政治と習俗との関係が問い直されている今日、改めて振り返ってみる価値を含んでいるのではなからうか。

## 2 自然環境としての「自然」認識と「一般意志」・「徳」、「万物の秩序」

### (1) ルソーの生命論的自然観と一般意志

J.-L. ルセルクルは、ルソーが「たえず多彩な形式の下に提起する問題は…個人の権利と集団の権利とのあいだの関係という問題である」<sup>(43)</sup>と指摘している。ルソーは、この個と集団との調整問題を、政治的には特殊意志と一般意志の合致(徳—Vertu.O.C., t, III, P252)に求めたともいえよう。R. ポランは一般意志の「最初の正当化」が「自然の生命体との類比によって立論されている。」<sup>(44)</sup>ことに注目している。その根拠は、ルソーの次の言葉である。<sup>(45)</sup>

政治体(corps politique)は、…人間の身体に類似した、生命をもつ一つの組織体と考えることができる。すなわち主権は頭をあらわす。法と習慣は脳髄である。…人間の身体と政治体の生命は、全体にとって共通の自我であり、すべての部分の相互感覚と内的な連絡である。…したがって政治体は一つの意志をもつ一個の精神的存在(un être moral)である。そしてこの一般意志は、常に全体および各部分の保存と安楽(bien être)をめざすものである。

ルソーの自然観は、前章(1)で見た通りホブズスなどのような物理学的な機械論的自然観ではなく、むしろ生物学的な生命論ないし目的論的な自然観に属するものであった。政治体の「法律の源泉をなす」一般意志が、ポランの注目するように生命体との類比によって最初に正当化されていることは、その発想のベースの一つに、ルソーのこの有機体的、生命論的自然観があったとも考えられよう。

元来、一般意志の語はディドロが『百科全書』の「自然法」の中で、「最初に使用したもの」<sup>(46)</sup>とされている。彼はそこで一般意志を「生物学的な集団的自己保存の本能に似たものとして説明」<sup>(47)</sup>しているとの指摘がある。またポランも、ルソーの最初の着想では「一般意志の無体の集団的存在におけるは、保存本能の〔有機体の〕自然的存在における如きもの」<sup>(48)</sup>とされていると解している。ルソーは、一般意志の語を「ディドロから学んだ。」<sup>(49)</sup>とのことであるが、有機体的自然観の持主であるルソーは、ディドロの含意を容易に理解し、これを同じ『百科全

書』の一部をなす、『政治経済論』における「一般意志」立論の参考にしたとも推察されよう。

## (2) ルソーの植物研究と「徳」

前節で見た目的論的自然観は、アリストテレスの自然観でもあった。ルソーの蔵書等の目録には、『政治学』と『ニコマコス倫理学』などが見られる<sup>(50)</sup>。ルソーとアリストテレスには、自然研究の態度・方法に類似があるようで、後者に「生物観察の膨大なデータ」<sup>(61)</sup>がある如く、前者の著作にも植物等の観察結果が頻繁にあらわれている。またアリストテレスは、「あらゆる自然物に必ず何か驚くべきものがある。…われわれはためらうことなく、いかなる種類の動物の研究にも向かわねばならない。そうすればすべてのものに何か自然的で美しいものが認められるであろう。けだし、自然物においていかなるものも偶然ではなく、すべてが目的に向けられていることがきわめてよく認められるからであり、それらの生成と結合の目的は美しきものという形をとるからである。」<sup>(62)</sup>と述べている。ルソーもまた、植物組織、形態、色彩、香りなどを観察することで、「自然を探求し、研究し、認識することを知ろう。自然の美しさに賛嘆することを知ろう。」<sup>(63)</sup>と言っている。この両者に共通する特徴の一つは、いづれも個々の自然構成物（マイクロな自然）から秩序と体系のある自然全体（マクロな自然）の「美」に迫ろうとする態度であることが指摘されよう。

このような、いわば個からそれを包含する全体へ入り込もうとするルソーの志向をもっともよく伝えていると思われる発言の一つを次にあげておきたい。

草から草や、植物から植物へとさまよい歩いて、それらをくらべ、そのさまざまな特徴をくらべてみて、その異同に注意をはらい、こうして植物組織を観察して、これらの生ける器械の動きと営みを追及し、ときにはその一般的法則や、さまざまな構造の原因と目的の探求に成功し、そういう楽しみのいっさいをあたえてくれる者にたいする感謝にみちた驚嘆から生まれる魅惑に浸る。（『夢想』P.119）

ここにはルソーの視線と心の動きが、マイクロな自然からマクロな自然へと、しだいに段階を追って移行していく過程がありありと示されている。また彼は、「個別的な対象」が「すべてかれの視界」を去った時、「すべてを全体のうちにおいてのみ見、また感じ」る。「かれは甘美な陶酔を感じて、その広大な美しい体系のなかに消え失せ、それに同化した自分を感じる。」（『夢想』P.111）と言う。

ルソーは、「すべての価値をそれに奉仕させようとしたもの、それによってのみ人間の本来性が回復され、そこから真の幸福をも得ることができると信じたもの」を、特殊意志と一般意志の合致である「徳」…の概念で包括した<sup>(64)</sup>。彼の植物研究は、前章で引用した中川久定やマルセル・レモンが指摘するように、個と、それを含む全体との同化の感覚を彼にもたらししている。これらは、自分を「すべてが喜びである体系のなかに秩序づけ」（『エミール』中、P.176）るところに、即ち「神の偏在する宇宙的秩序への同化」に「徳の一つの極限」<sup>(65)</sup>を見い出すこと、特殊意志は「一般意思に従うことにおいて「徳」に達する」<sup>(66)</sup>ことをルソーに示唆していたものとも思われよう。そしてその底流には、「広大な美しい体系」への「同化」の「甘美な陶酔」、即ち「自然の根源につながり万有と交感し、応和する歓喜」<sup>(67)</sup>があったと考えられる。またマイクロな自然とマクロな自然の接続を見通すルソーの「透視力」はおそらく自然界の秩序と社会のそれとの関連を考えさせたことであろう。ルソーは「自然の秩序は社会の

秩序よりもいつも重くみられるだろう。」(『エミール』中、P.272)と言っている。こうした中で「一般意志とは、人々の関係下で、全体の保存を命ずる自然法の教えを実効力あらしめる方法として提出された」<sup>(58)</sup>のではなかろうか。

なお前章(3)で見た、花壇の花が、「自然の能力を奪われた怪物」で、こうした「人間がものの本来の姿」を歪める、誤った行為はとくに、「市民社会(*la société civile*)」でおこなわれているとのルソーの言葉は、彼の植物研究が、いわばその弁神論である『社会契約論』のテーマとも結びついていることをうかがわせるものがある。

### (3) 「万物の秩序」の認識と生態学的知見

ルソーは、一般意志を「つねに全体の保存と全体の福祉とに向かう意志」であり、「自然的に事物の本性に秩序づけられている」<sup>(59)</sup>と考えたとの指摘がある。つまり「社会的全体の一般意志」は「万物の秩序に従っているから正しい」<sup>(60)</sup>ともいえるのであろう。

この一般意志が宿る政治体をルソーは、本章(1)で見たように、人間の生きた「身体に類似したものとして考え」、どちらもその生命が「すべての部分の相互感覚と内的交通(*correspondance interne—O.C., t, III, P.245*)」にあり、この交渉(*Communication*)が止まると「人間は死に、また国家は瓦解する。」とした。ここには、組織部分間相互の有機的な交流を重視するルソーの姿勢がうかがわれる。

こうしたルソーの感性は、『エミール』におけるルソーの「自然宗教」の考え方にもあらわれている。彼の「自然」の一つは、本稿冒頭で触れたように、万物の秩序、神であった。サヴォワの助任司祭は、高い丘の上でエミールに「宇宙を構成している存在がそれによつてたがいに助けあっている内密の対応関係(*l'intime correspondance—O.C., t, III, P.578*)」と「あらゆる存在の調和とそれぞれの部分が他の部分を維持していこうとするみごとな協力(*l'admirable concours*)」(『エミール』中、P.139~140)があるところに、「世界の秩序」の存在を確認すると言う。そしてそれは「草をはむ羊、空を飛ぶ小鳥、…風に吹かれていく木の葉のうちにも存在する」と説明する。

これら『政治経済論』と『エミール』の両言説に共通するところは、政治体にも、宇宙にも、それらを構成する各部分間の相互扶助や対応関係(*correspondance*)があり、そこにそれらを成り立たせている生命ないし秩序が宿っているとしている点であろう。

ところでルソーは、生態系秩序の存在について、前章1の(1)、②で触れたように、ビュフォンを次のように引用している。

植物はその養分として、土地からよりも空気や水からはるかに多くの物質をひき出すので、腐敗するにあたっては土地からひき出したよりも多くのものを土地に返すことがある。なお、その上に、森は水蒸気をひき止めることによつて雨水を決定する。こうして、人が永く触れないで保存するような森林のなかでは、植物のために役立った地層(*la couche de terre*)が非常に増大するだろう。ところが動物は土地からひき出すよりも土地に返すほうが少なく、また人間は火やその他の用途のために木材や草木を多量に消費するので、その結果として、人の住む地域の植物地層はたえず減少し、ついには中央アラビアやその他非常に多くの近東の地方のように変わってしまわねばならない。この近東は事実、もっとも古くひとの住まった風土なのだが、そこには塩と砂だけしか見出されないのだ。『博物誌』「地球理論の証拠」(第七条) … (『不平等論』原注(d)P.139. *O.C., t, III, p.198*)

ルソーはここでピュフォンの言葉を借りて、土地、空気、水、植物、動物など被造物間相互の生態的な連関関係の存在を語っている。これらの生態的な調和秩序は、人間の消費活動増大の結果崩壊し、もはや生命の存在しない「塩と砂」だけの世界になる。即ち、生態系秩序、つまり全体を構成する各部分の「内的交渉・交通」が止まると、宇宙の一部を成すある共生群は、その生命を失うことにルソーは注意を促しているのである。

『不平等論』と『政治経済論』の執筆時期は諸説があって確定が困難とのことであるが、R.ドラテは、前者の完成後後者が書かれたと考えるのが「もっともナチュラルだと述べている。」<sup>(61)</sup>もしこれを信ずれば、ルソーの生態学的知見は、後の『エミール』は勿論のこと、『政治経済論』の執筆前にも獲得されていたと見ることができよう。組織体の有機的な相互作用のみならず、万物の秩序における対応、相互協力・調和関係の存在を探求するルソーの感覚をますます鋭くしたものの一つに、彼が既に習得していた生態系秩序についての知識をあげることができるのではなかろうか。

### 3 ルソーの「自然」・「環境」認識と「社会的ジレンマ」問題

#### (1) 「社会的ジレンマ」問題とルソー

「社会的ジレンマ」問題とは何であろうか。環境社会学のある研究<sup>(62)</sup>では、それを次のように説明している。

整髪や殺虫等のスプレー類に使用されているフロンガスは、オゾンホール形成とかわることで地球環境の悪化を惹起することが知られている。地球環境保護は、全生命にとって望ましいことである。一方、スプレー使用は環境破壊につながるがわかっているにもかかわらず、個人的には日常的に便利で合理的な行為である。このように社会には、個人の合理的選択結果から生じる状態よりも全社会構成員にとって望ましい状態が存在するために、「個人的合理性を追求する結果、社会的に非合理的な状態に陥ってしまう」ことがある。「これが社会的ジレンマである。」。そして「環境問題は、…社会的ジレンマの構造を持つ最も重大な問題」であるが、また他方、この問題は、「個々人の利害が衝突する中で、どのようにして秩序は形成され、維持されるか」という「ホブズの秩序的秩序の問題」とも関係を持つと指摘されている。

この社会的ジレンマの解決方向としては「構造的要因」と「個人的要因」の制御があるが、ともにめざすところは、「行為者が意思決定する際の認知構造においては、もはや社会的ジレンマでない、という状況を創り出すこと」だという。

以上の説明によれば、環境問題に関連した「社会的ジレンマ論」は、「解放された個人の欲求を前提に効率を追求しようとするシステム」である「近代文明の限界を突破する」方法を模索しようとする問題意識に立つものと理解されよう。ルソーもまた周知の通り、環境問題の摘発を含め、当時の文明社会を批判し、『社会契約論』などで、私益と公益の間にいわばジレンマのない、新しい社会像を構想しようとした。この意味では、現代の環境問題にかかわる「社会的ジレンマ」論とルソーの考えとは、時代をこえてほぼ同じような問題意識に身を浸しているといつてよかろう。この点は例えば、次のようなルソーの言辭にもあらわれているように思われる。

各個人は人間としては、一つの特殊意志をもち、それは彼が市民としてもっている一般意志に反する、あるいはそれと異なるものである。彼の特殊な利益は、公共の利益とは全くちがったふうに彼に話しかけることもある。(『社会契約論』P.35) (圏点 引用者)

ここで一般意志は「公けの利益…共通の利益だけをこころがける」ものとされている。

これらの言葉を前記の「社会的ジレンマ」論の説明と比べると、あたかもルソーは、例えていえば、我々が地球環境保護などの共通の利益(市民として我々が持つ一般意志)の価値を知りつつ、スプレー使用の便宜性追求などの私的利益(一般意志に反する特殊意志)を追求するようなことがあることを知っていたかのごとく思われよう。一般意志とは前章で見たように、彼の生命論的自然観をベースとして、有機体とのアナロジーによって得られた概念であった。

またルソーは、「特殊意志の総和であるにすぎない」「全体意志(*la volonté de tous*)と一般意志のあいだには、時にはかなり相違があるものである。後者は共通の利益だけをこころがける。前者は、私の利益をこころがける。」(『社会契約論』P.47)とも言っている。この言葉は、前記の言辞とともに、彼が社会的ジレンマ論でいう、「個々人の合理的選択の結果として生じた状態よりも、全ての社会構成員にとって望ましい状態が存在する」旨の認識をすでに有していたとの印象を与えよう。社会的ジレンマ論とルソーの「徳」は、いづれも個と集団の調和をテーマとしているので、両者の間に以上のような類似性があらわれるのであろう。

ところでルソーは、前述の通り、特殊意志と一般意志の合致を「徳」と呼んだわけであるが、この「徳」即ち、私益と公益の一致が実現されれば、個と共同体間の社会的ジレンマは解消されるはずである。それはどのようにして解消されるとルソーは考えたであろうか。

## (2) 社会的ジレンマ解消のためのルソーの示唆

### ①私益の犠牲とルソーの「自然」認識

フロンガスとオゾンホールの関係に立ち戻って考えると、現在我々が進めていることの一つは、フロンガス・スプレー使用の禁止、つまり公益のために私益を犠牲にすることである。ルソーもまた『エミール』(下、P.258)の中で、有徳たるための、この私益の犠牲を次のように説いている。

自分の情念を克服して、有徳な人間になれるのだ。…公共の福祉(*le bien public—O.C., t, IV, P.858*)は、ほかのすべての者にとって口実として使えるのだが、かれにとっては現実の動機になる。かれは自分と戦い、自分を征服し、自分の利益を共同の利益(*l'interest commun*)の促進のために犠牲にすることを学ぶ。

この公益のための私益の犠牲と、ルソーの「自然」認識との関係があらわれているのが、彼の自然宗教観が示される「サヴォワの助任司祭の告白」であろう。助任司祭は、共同の利益への奉仕を呼びかける「自然の感情」と自己の利益優先を語りかける「理性」の二者択一のうちに動揺していた。そこに「あらたな光りがわたしの心を照らして」くれ、次のように悟る。

善人は自分を全体との関連において秩序づけるが、悪人はすべてを自分に結びつけて秩序づける。…すべてが善である体系のなかに自分は秩序づけられていると感じること以上に快い境地がどこにあるというのだ。(『エミール』中、P.175,P.176)

ルソーの「自然」の一つが「万物の秩序」=神であったこと、またもう一つの「自然」である自然環境のトータルな体系的理解が、今でいう環境倫理の自然理解にかなり近い要素を有していたと思われることは、すでに前述した。上記の助任司祭の言葉には、私益の犠牲が万物の秩序と自己との同化ないしその内面化によってなされうる旨のメッセージが含まれているとも理解できよう。マルセル・レモンや中川久定は、すでに見たように、植物の細部への注視から宇宙的秩序への没入を説いている。即ちマイクロな自然からマクロな自然への連接を透視するルソーの「自然」認識は、自己犠牲的行為を社会的に合理的な行為として価値づける一要因としての作用力を持つと解釈されよう。

## ② ルソーの「環境教育」

我々が今なしつつあるもう一つのことは、環境教育であろう。環境破壊の原因やその対策、グローバルな国際協調の必要性などのほか、生態学や人間と自然との諸関係（自然観）、環境倫理学などがその内容に含まれつつある。ルソーの教育思想のなかには、すでに筆者が別稿で指摘している<sup>(63)</sup>ところだが、環境教育思想と見られるものがある。その要点をくりかえすと、エミールに対するカリキュラムの一つとして、内容的には、自然現象(Phénomènes de la nature O.C., t. IV, P430)や事物の教育、博物学、自然史、宇宙誌などがある。また方法としては「実物・現場学習」やいわゆる「消極教育」などが推奨されている。またこれらは、環境問題の摘発をその一翼とする文明社会批判にもとづく、エミール=自然人教育の一環として位置づけられている。その意味ではルソーの「環境教育」は、効率優先によって環境破壊をもたらした近代文明批判を契機に提唱された現代環境教育思想と、その誕生の機縁を共有しているといえよう。

この「環境教育」の発想は、『エミール』などに見る通り、彼の植物観察や自然環境の中に共生する生物種の多様性の理解、自然愛の感情などと密接に関連している。そこには個と互いに共存する共同体との有機的関連に大きな注意を払う、いわば環境倫理教育上の「自然」認識と似たものがうかがわれる。

環境問題に関する「社会的ジレンマ」解決をめざす現代環境教育への、ルソーの示唆の一つは、生物種の多様性を身をもって感じ取れる「実物・現場学習」に立脚して、生命間共生関係や、さらに進んで「生態圏秩序」(万物の秩序)を感得していくという方法を重視していくことであろう。

また彼は、自然、社会、環境に関する独自の認識から、「環境教育」の目的、内容、方法を引き出している。これは、環境問題をめぐる「社会的ジレンマ」とその解消を教える教師に対して、まず自分自身がどのような自然、社会、環境の認識を持ち、そこからいかなる教育内容を構想していくかというアプローチを示唆するものであろう。環境問題に関するジレンマなき社会を作り上げ、発展させていく環境教育とはいかなるものか。ルソーはそれを今、我々に向かって問いかけたいのではなからうか。

### ③ ルソーの法としての「世論」、「徳」と生態圏秩序

ルソーの「世論」については第1章でも触れたが、彼は法を「一般意志の表明」（『社会契約論』P.175）とした。そのうち「もっとも重要な法」で「これこそ、国家の真の憲法（constitution）をなすもの…他の法が老衰し、または亡びてゆくときに、これにふたたび生命をふきこみ、またはこれにとって代るもの」が「ことに世論」であった。「現在の政治家たちに知られていない法のこの部分こそ、実は他のすべての法の成否をにぎるものである。」（『社会契約論』P.81～82）とルソーは言っている。

現在我々は地球環境保護のために国の内外にわたり、規制を強化しようとしている。オゾン層保護条約もその一つで、これは「国際環境外交の輝かしい成果」<sup>(64)</sup>とのことである。しかしオゾン層破壊のスピードは予想以上に早く、絶えざる監視と規制改定が必要と見られている。「社会的ジレンマ問題」解決のための「構造的要因」の一つとして、法や条約による規制があげられようが、その改定は利害関係が複雑で、地球環境悪化のスピードの上昇によっては、事実上十分な効力を一時的にしる失なうケースもありうるであろう。こうした法の「老衰」にあたって、それに「ふたたび生命をふきこみ、またはこれにとって代るもの」、それは「現在の政治家たちに知られていない」、「市民たちの心にきざまれている」法である「世論」だとルソーは言うであろう。彼は、ともすれば迅速な対応が遅れがちな法的、行政的措置を十分に「監察」する、生々とした世論を展開せよと、我々を励ましているようである。

またルソーは、「他のすべての法の保障」として「刑法」をあげているが、彼は「徳」について次のように、注目すべきことを述べている。<sup>(65)</sup>

徳は、必ずしもやさしくはないのです。徳は、悪に対しては適当な厳しきで、自己を武装することを知っています。徳は、罪に対しては怒りに燃えたつのです。

これまでの自然と人間との関係を反省し、その間に新しい関係を築こうとする主張の中には、「自然契約」の考え方、即ち人間の自然への、一方的な「寄生関係」を排して、自然と人間の共生関係を明確にするため、新たに「自然を契約の当事者として認め」<sup>(66)</sup>る「自然契約」を結ぼうとする主張がある。これは『社会契約論』におけるルソーの言葉を借りれば、「負担は全くお前にかかり、利益は全くわたしのものになるような、約束」であった、従来の自然と人間の間を、ルソーが不平等なものとして批判した、それまでの社会契約と同じように破棄し、改めて対等な関係を結ぼうとするものと理解できる。

「徳」とは、一般意志と特殊意志の合致であった。今この合致を生態圏秩序と私益追求との調和と見れば、これが効率追求にあまりにも急な近代文明が生み出した、環境問題という「悪」によって破れた時、どのような怒りが我々に迫ってくるのであろうか。ルソーのこの言葉は、不吉な響きを伴っている。

しかし、彼は前述の通り、ビュフォンらとともに動植物と、土壌間の生態系の存在に注目した。今この生態系は、グローバルな生態圏秩序の一部をなしていることが判明している。

ルソーは、「共通の幸福の総和が各個人の幸福のより大きな部分を提供することになる」（『社会契約論』P.132）と述べた。彼の「徳」＝一般意志と特殊意志の合致の要請は、こうした生態圏秩序の制約を前提とした「社会的ジレンマ問題」の解消が求められる現代にあっ

て、にわかにその説得力を増すようである。ルソーが「徳」にかけた夢には、今、新たな実現の場が開かれつつあるのではなからうか。

## 結びに代えて

「自然」(Nature, Natura, Physis)の一語は、古代ギリシャ以来、中世、さらには18世紀啓蒙思想期を経て、環境問題に直面する今日に至るまで、その意味をくりかえし問われてきた言辭の一つであろう。現在「自然は根本的に如何なる性質を有しているのか、そもそも「自然」という語によって人は如何なる現象を言表しようとしているのかといった基本的事柄が問われるべきであろう。」<sup>(67)</sup>との声も聞かれる。18世紀ルソーは、この語の意味を実に多様な形で言表しようとした。その一つが美と秩序の持主である「自然」であり、生態作用を持つ「環境」としての「自然」であり、また「記号」としての「自然」であった。古来から人々が、「自然」の語によって「言表しよう」とした意味は、まだほかにも歴史の中に隠されているのかもしれない。今日の我々に必要なことは、それらを掘り起し、「自然」の多義性の中にひそむ「基本的事柄」とは何かを、たえず問い返していくことではなからうか。

### 注

- (1) E.カッシーラー著、生松敬三訳『ジャン＝ジャック・ルソー問題』みすず書房、1997年、81頁、94頁、95頁。
- (2) 恒藤武二「ルソーの社会契約説と「一般意志」の理論」、桑原武夫編『ルソー研究 第二版』、岩波書店、1970年、150頁。
- (3) 平岡昇「ルソーの「自然状態」についての試論」、『思想』1971年9月、岩波書店、30頁。
- (4) 舟橋豊「「自然」の変容とルソーとディドロにおける自然の概念(4)」『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』III-2、1982年、109頁。
- (5) 前掲(3)。
- (6) ホメーロス著、呉茂一訳、『オデュッセイアー』上、岩波書店、1992年、374頁。
- (7) 荒井宏祐「J.-J.ルソーにおける「自然」・「社会」・「環境」認識と「環境教育」をめぐる考察序説」、『文教大学国際学部紀要』第8巻、1998年3月。
- (8) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、昭和63年、162頁。
- (9) 前掲(3)、28頁。
- (10) ブチャー著、田中秀央、和辻哲郎、寿岳文章訳『ギリシャ精神の様相』岩波書店、昭和15年、226頁。
- (11) 前掲(7)。
- (12) G.ランソン、P.テュフロ著、有永弘人、新庄嘉章、鈴木力衛、村上菊一郎共訳『フランス文学史』II、中央公論社、1973年、125頁。
- (13) Marguerie Richebourg, "Table des ouvrages possedés, lus ou mentionnés par Rousseau. "Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau". N021, 207頁。
- (14) ビュフォン著、菅谷暁訳『自然の諸時期』法政大学出版局、1994年、160頁～161頁。



- (15) ジャック・ロジェ著、ベカエール直美訳『大博物学者ビュフォン 18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌』、工作舎、1992年、413頁。
- (16) 同上305頁。
- (17) 前掲 (15) 277頁。
- (18) 前掲 (14) 20頁。
- (19) スタロピンスキーが、ルソーとビュフォンとの関連に注目していたことが、平岡昇によって指摘されている。本田喜代治、平岡昇訳『人間不平等起源論』岩波書店、1990年、270頁。
- (20) 原語引用は、Œuvres complètes, Pléiade, 1964年。  
以下本文ではO.C., t. III, P. 198などと記す。
- (21) 前掲 (7) の拙稿でも指摘。
- (22) メルシエ著、原宏編訳『十八世紀パリ生活誌—タブロー・ド・パリー—』(上)、岩波書店、1989年、127頁。
- (23) 河合義和著『公害法体系—法と行政の接点—』丸善株式会社、1970年、306頁。
- (24) 前掲 (7) の拙稿でも指摘。
- (25) 中川久定著『蘇るルソー—深層の読解—』岩波書店、1983年、203頁。
- (26) 前掲 (7)。
- (27) 高橋達明訳「植物学についての手紙」『ルソー全集』第12巻、白水社、1987年、62頁。
- (28) 高橋達明訳「植物学断片」、『ルソー全集』第12巻、白水社、1987年、141頁、142頁。
- (29) 前掲 (27) 40頁。
- (30) レイモン・ポラン著、水波朗、田中節男、西嶋法友訳『孤独の政治学—ルソーの政治哲学試論—』九州大学出版会、1996年、15頁。
- (31) 前掲 (7) の拙著でも指摘。
- (32) 前掲 (25) 202頁。
- (33) 前掲 (25) 203頁。
- (34) 中川久定著『自伝の文学—ルソーとスタンダール—』岩波書店、1979年、46頁、48頁。
- (35) 桑原武夫編『ルソー』岩波書店、1962年、99頁。
- (36) 前掲 (3) 43頁。
- (37) 舟橋豊「「自然」の変容とルソーとディドロにおける自然の観念 (3)」、『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』II—2、1981年、164頁。
- (38) 坂本百大「環境記号論—そのポストモダン」、日本記号学会編『感覚変容の記号論』(記号学研究17、1997年)、185頁。
- (39) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(下)、岩波書店、300頁、301頁。
- (40) 前掲 (38)。
- (41) W.リップマン著、掛川トミ子訳『世論』(上)、岩波書店、44頁。
- (42) 同上 (下) 16頁。
- (43) ジャン=ルイ・ルセルクル著、小林浩訳『ルソーの世界—あるいは近代の誕生—』法政大学出版局、1993年、294頁。
- (44) 前掲 (30) 163頁。
- (45) 阪上孝訳「政治経済論」『ルソー全集』第5巻、白水社、1984年、66頁、67頁。O.C., t. III, 244頁、245頁。

- (46) 前掲(2) 151頁。
- (47) 土橋貴著『ルソーの政治哲学 宗教・倫理・政治の三層構造』青峰社、1988年、188頁。  
 なお、C.W.ヘンデルも、「親友関係のような雰囲気の中で、ルソーはポーブ、ライブニッツ、シャフツベリィの、伝染しやすい楽観主義につかまり、一般意志について、生物学的な話法(biological way of speaking)を採用した。」と述べている。  
 C. W. HENDEL, *Jean-Jacques Rousseau moralist*, oxford university press, vol 1, 1934年、108頁。
- (48) 前掲(30) 163頁。なお、井上幸治訳「自然法」『ディドロ著作集第3巻 政治・経済』法政大学出版局、1989年、14頁～15頁参照。
- (49) 前掲(47) 188頁(土橋貴)。
- (50) 前掲(13) 201頁、202頁。
- (51) 牛田徳子「アリストテレスの自然観」、上智大学中世思想研究所編『古代の自然観』創文社、1989年、47頁、48頁。
- (52) 藤原保信『自然観の構造と環境倫理学』御茶の水書房、1991年、11頁。なお、島崎二郎訳「動物部分論」出隆監修『アリストテレス全集』8岩波書店、1969年、281頁、282頁参照。
- (53) 前掲(28) 141頁、142頁。
- (54) 森口美都男「ルソーの倫理・宗教思想」桑原武夫編『ルソー研究 第二版』岩波書店、1970年、68頁、69頁。
- (55) 作田啓一「ルソーのユートピア」(上)『思想』岩波書店、1975年11月、6頁。
- (56) 野田又夫「ルソーの哲学」桑原武夫編『ルソー研究 第二版』岩波書店、1970年、40頁。
- (57) 前掲(54) 94頁。
- (58) 前掲(47) 176頁(土橋豊)。
- (59) 前掲(30) 163頁。
- (60) 前掲(55) 9頁。
- (61) 作田啓一「解説」『政治経済論』『ルソー全集』第5巻、白水社、1989年、486頁。
- (62) 海野道郎「社会的ジレンマ研究の射程」盛山和夫、海野道郎編『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社、1991年、139頁～165頁を参照した。以下の引用は、これによる。
- (63) 前掲拙稿(7)。
- (64) レスター・R・ブラウン著、加藤三郎監訳『ワールドウォッチ 地球白書1992-93 いまこそ環境革命を』ダイヤモンド社1992年、295頁。
- (65) 「ボルド氏への最後の回答」ルソー著、前川貞次郎訳『学問芸術論』岩波書店、1990年、127頁。
- (66) 米山親能「訳者あとがき」ミッシェル・セール著、及川馥・米山親能訳『自然契約』法政大学出版局、218頁。
- (67) K・リーゼンフーバー「序言」上智大学中世思想研究所『古代の自然観』創文社、1989年、1頁。